

日本語と韓国語における敬語表現の比較

曹 美 庚

(受付 2003年5月12日)

I. はじめに

日本語の敬語表現は、言語学的にみても珍しいほど発展している。そのため、日本語を母語としない者には、日本語が一層難しい言語に映ってしまうのである。しかしながら敬語表現は日本語だけの特徴ではなく、さまざまな言語において何らかの形で敬語表現は存在する。とりわけ、儒教の影響が根強く残る韓国では、敬語表現が日本語に勝るとも劣らないほど発展している。日本語と韓国語は非常に類似した言語といわれているが、敬語表現もまた他の文法的類似性ほど似通っているといえよう。

本稿では、さまざまな言語における敬語表現を見ることで、日本語と韓国語の敬語表現が如何に類似したものとして認知されているかを考察する。それを踏まえたうえで、両言語における敬語表現の類似性と相違点をさらに詳しく検討することにしたい。

II. 諸言語における敬語表現

敬語表現は日本語だけがもつ独特の性質ではなく、世界の言語の中にはさまざまな形で敬意を表す表現が存在する。話し手、聞き手、話題の登場人物などの人間同士の間関係への配慮や、場面、状況、話題などの対人的配慮を表現しうるさまざまな性格や種類の敬語表現が存在する。

敬意表現はいろいろと分類できるが、話し相手への敬意表現と話題の登場人物への敬意表現という観点から考えると、日本語には話し相手に対する敬意を表す対者敬語と話題の登場人物に対する敬意を表す素材敬語が存在する。タイ語においては、王族に対して特別な語彙を使用する敬語表現があるが、それは相手敬語しか持たない場合の敬語表現と考えられる。モンゴル語は、登場人物に対する敬語だけが存在する言語といえる。相手敬語と登場人物敬語の両方を持つ言語には、日本語、韓国語、ジャワ語などがある。また、話し相手が登場人物で、両方が一致したときにだけ敬意表現が使われるものとしては、多くの現代ヨーロッパ言語が挙げられる。

ある人物への敬意表現が固定していなく、人間関係や場面の状況に応じて、その都度選択

される相対的敬意表現は相対敬語，年齢や社会的地位などを基準として敬語が決まっている絶対的敬意表現は絶対敬語といえる。こうした相対敬語と絶対敬語の観点からは，日本語は相対敬語，韓国語は絶対敬語に分類される。

次は，敬意表現が対称的か否かであるが，現代のヨーロッパ諸言語の多くが対称的敬意表現を原則とする言語である。これには，二人称代名詞の頭文字の T と V の二大系列がある。そして，話し相手の一方が親密な関係を表現する T 系列の表現を用いると（ドイツ語の *du*，フランス語の *tu*，チェコ語の *ty* など）もう一方の話し手も同じ T 系列を選び，話し手の一方が改まった表現である V 系列（*sie*, *vous*, *vy*）を用いると互いに V 系列を選んで応えるのが礼儀となっている。

語彙的・文法的に敬意表現専用の言語形式を持つか否かを切り口にすると，日本語は語彙的な敬意表現と文法的な敬意表現をともにもつ言語であり，韓国語とジャワ語は日本語よりもさらに豊富な敬語専用の言語形式の体系を持つ言語である。多くのヨーロッパ言語においても，動詞の活用変化や人称の敬称への転用などがあり，これらは敬語専用ではないが，語彙的・文法的に敬意の表現形式を持つ言語であるといえる。これらに対して，アラビア語やスワヒリ語などは語彙的・文法的手段での敬意表現形式を持たない言語である。

このような世界言語のさまざまな敬意表現を素材に，敬語研究の流れも，個別言語研究中心から世界の諸言語の共通性・普遍性を探求しようとする研究へとシフトしてきた。そうした研究としては，具体的な敬語の使用現象を対照研究するもの（林・南1973，井出他1986，萩野他1990，1991，賈恵京2001）や丁寧な言語使用（*politeness*）についての理論的まとめなどがある（P. Brown and S. C. Levinson 1987，井出洋子1987）。

さらに，世界の敬語形式を類型論的立場から分類しようとする試みもある（王子のキツネ1985，彭国躍1997）。言語の類型別に見ると，中国語のような孤立語では，形態論的な文法的手段は発達しておらず，語彙の概念的意味に含まれている敬辞（貴国—お国，尊府—お宅，龍児—お赤ちゃん）や発話参加者の価値観（立派な，優雅な，劣る，貧しい）に基づく敬辞が用いられており，メタファー型敬語といえる。

膠着語である日本語や韓国語では，文法的機能を担う敬語専用の助詞・助動詞が発達しており，敬語の形式体系が存在する（お～になる，れる・られる，いらっしやる／～께서（으）시다）。さらに，敬語の表現形式は，発話の文脈情報を文法化するダイクシス（*deixis*，直示）型敬語といえる。

屈折語であるギリシャ・ラテンなどの古典語を典型とするフランス語やドイツ語などのヨーロッパ諸言語は，人称や時制・法による語尾変化が複雑で，敬語のための文法的手段は発達していない。もっとも，二人称代名詞の敬語的使い分けや，英語の依頼要求表現（*Please*……より *Would you please*……が丁寧）などの発話行為を丁寧に行うポライトネス現象は，スト

ラテージ型敬語といわれる。

日本語と韓国語はともにウラルアルタイ語系の膠着語に属し、語順や文法が類似しているだけでなく、敬語表現も発達している言語である。敬語における類型論的分類においても日本語と韓国語はまったく同じグループに属し、敬語の体系や種類、用法や仕組みにおいても似通っている。こうした日本語と韓国語の敬語については、次節においてさらに詳しく考察していきたい。

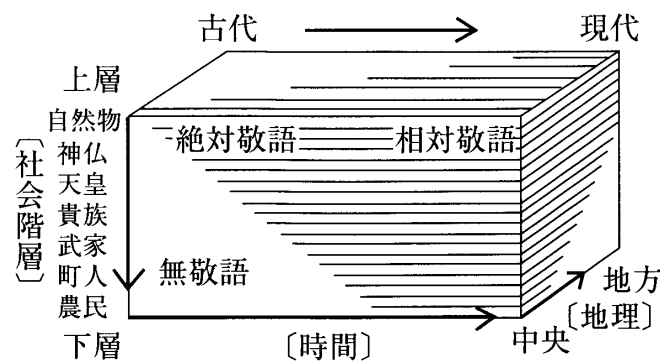
III. 日本語と韓国語における敬語の特徴

1. 両言語における敬語の性質

日本語の敬語は、敬意の対象や性質を基準にする伝統的な枠組みでは、尊敬語、謙讓語、丁寧語の三つに分けられる。敬語の分類は研究者によって異なるが、誰を尊敬し、どのように尊敬するのかによって、動作の主体や動作主の動作対象を尊敬する素材敬語と情報を受け入れる聞き手を尊敬する対者敬語に分けられる。日本語においては、素材敬語に尊敬語と謙讓語が含まれ、対者敬語には丁寧語が含まれる。韓国語の敬語も、文章の主体に対する主体尊敬法と聞き手尊敬法に分けられる。もっとも、韓国語の場合は、話し手と聞き手や文章の主体との関係によって尊敬の如何が決まる。

萩野他(1990)は、敬語を聞き手に向けられたすべての尊敬表現を扱う聞き手敬語と、聞き手以外の第三者に向けられた敬語表現である第三者敬語とに区分し、日本語と韓国語の敬語表現を考察している。日本語の敬語は、社会関係や親疎関係を重視している相対敬語であるのに対して、韓国語のそれは、話し手と聞き手との年齢差を重視する絶対敬語であるといわれている。

絶対敬語は、目上の人物や相応する身分にある人物であれば、身内か否かにかかわらず高



(出所：井上(1988) 29頁)

図1 敬語使用の伝播模式図

めることである。金田一（1959）によると、日本語の敬語は神仏や自然物へのタブーから発達したもので、対人関係よりはむしろ、恐れ多い存在に対して用いられたとされる。国語史の資料をたどっている辻村（1971）においても、敬語は古代から現代にかけて絶対敬語から相対敬語へ変遷し、身分階級が上層の有敬語から下層の無敬語に、地理的には都から辺境へと伝播したとされている（図1）。

このように、日本語の古代語においても絶対敬語が使われており、日本語の敬語の使い方の歴史は、菊池（1994）でも言っているように、古くは身内敬語に加えて自敬表現まで行われていた絶対敬語であったが、まず自敬表現が話し言葉で弱まり、聞き手によって敬度を加減するという相対敬語的な要素が増してきて、絶対敬語から相対敬語へ変遷してきたといわれる。それに比べ、韓国語では、儒教の思想を基盤とする道德観念が反映された年齢や社会的地位などで決まる一定の対象について、如何なる言語的場面においても常に一定の敬語が使われる絶対敬語表現のルールが守られているといえよう。

2. 語彙的・文法的な敬語表現の分類

1) 名詞の敬語法

名詞の敬語法には、①名詞そのものの敬語表現と、②接尾語による敬語表現、③接頭語による敬語表現があり、日本語と韓国語のいずれにおいても、主体待遇、客体待遇、聞き手待遇でその対象人物や関連物を高めるために用いられる。

① 名詞そのものが敬語と関わるもの

名詞そのものが敬語表現となるのは、日本語の場合、「一歳⇔ひとつ」「本日⇔きょう」「いかが⇔どう」「どちら⇔どこ」など、時間的・空間的対立関係にある語の使い分けによるものと、「知事」「博士」「社長」などの社会的地位を表す語に限られている。韓国語の場合は、「밥⇒진지 (ご飯)」「술⇒약주 (お酒)」「이⇒치아 (ご歯)」「말⇒말씀 (お話)」「병⇒병환 (ご病気)」「이름⇒성함 (お名前)」などが挙げられる。

② 接尾語による敬語表現

名詞に接尾語が付くことによって、敬語法と関係を持つものであり、これらは日本語にも韓国語にも存在する。例を挙げてみると、日本語には、「田中さん」「神父様」「愛子さま」「森田社長」「校長先生」「皆様方」「山田氏」などの接尾語が付いて、第三者に対する敬意を表す尊敬語があり、これらは接頭語「お」を伴って「お医者さん」「お嬢さま」「お坊ちゃま」「ご尊父さま」のように用いることもある。

韓国語にも日本語と同じく、「신부님 (神父様)」「따님 (お嬢様)」「선생님 (先生様)」「사장님 (社長様)」「이지수님 (リジス様)」「김보아씨 (金ボア氏)」「형제분 (ご兄弟)」「내외분 (ご夫婦)」「친구분 (お友達)」「여자분 (女性方)」のように、接尾語をつけて第三

者に対する敬意を表すものがあるが、ここにさらに接頭語をつけることはない。

また、日本語には「私ども」「せがれめ」「次郎儀」などのように、自分や自分側の人物を低めることで、聞き手に対してへりくだる意を表す謙讓語がある。韓国語にも「돌이녀석(ドリめ)」「자식놈(せがれめ)」などがある。

③ 接頭語による敬語表現

日本語には、「お～」や「ご～」などの接頭語をつけて、「お名前」「ご参加」「ご出席」のように、聞き手を高めるものがある。「お」や「ご」が名詞に付く場合、原則としては、「お知らせーご通知」「お招きーご招待」「お考えーご意見」のように、「お」は和語に付き「ご」は漢語に付く。「お」「ご」以外にも、「御心」「貴社」「貴婦人」「玉稿」「玉体」「尊父」「尊顔」「令息」「令夫人」「御地」「御社」「芳名」「大君」などがある。

韓国語の場合にも、接頭語をつけて尊敬を表す表現があるが、ほとんどが漢語表現である。「귀부인(貴婦人)」「귀사(貴社)」「옥체(玉体)」「옥필(玉筆)」「방명(芳名)」「고명(高名)」「어명(御名)」「어의(御衣)」「존체(尊体)」「존당(尊堂)」「영부인(令夫人)」などが例として挙げられる。

また、名詞に接頭語が付く謙讓表現としては、日本語と韓国語ともに「粗品(소품)」「小生(소생)」「拙作(졸작)」などがある。この他にも、日本語の場合は「お」や「ご」の接頭語が付いて、自分の言葉使いの上品さを表す美化語がある。これらは、聞き手や第三者に対する敬意に基づくものではなく、使用状況や意識面においても個人差が大きい。例として、「お盆」「お寺」「ご本」「お菓子」「おせんべい」「お味」「お花」「お塩」などが挙げられる。

2) 動詞の敬語法

ある動詞を形態的に敬語化する方法は、日本語の場合三つがあり、韓国語の場合二つがある。日本語におけるその一つ目は、敬語専用動詞への置き換えである。ある基本動詞に意味が近似し、常に何らかの待遇価値を伴う特定の動詞に置き換えるという方法であり、この敬語専用動詞は、その動詞自体に尊敬の意味が含まれている。たとえば、「食べる、飲む⇒召し上がる」「居る・来る・行く⇒いらっしゃる」「言う・話す⇒おっしゃる」「する⇒なさる」などがある。これらは、複数の基本動詞に対して一つの敬語動詞が対応する場合であり、適当な文脈が与えられないと、その意味が明確にならない。

こうした敬語専用動詞による敬語化は韓国語にも存在しており、たとえば、「자다(寝る)⇒주무시다(お寝りになる)」「먹다(食べる)⇒드시다/잡수시다(召しあがる)」「죽다(死ぬ)⇒돌아가시다(お亡くなりになる)」「있다(居る)⇒계시다(いらっしゃる)」のようなものがある。

二つ目は、特定語形の挿入による敬語化である。日本語の動詞の多くは助動詞「れる・られる」を動詞の語末につけることで、簡単に尊敬の意味を持たせることができる。たとえば、

「行く⇒行かれる」「来る⇒来られる」「見る⇒見られる」「話す⇒話される」「食べる⇒食べられる」などのように、助動詞「(ら)れる」が接尾語的に使われ、尊敬の意味になるのである。さらに、敬語専用動詞と助動詞「(ら)れる」が一緒に使われ、以下の例のように二重敬語になる場合もある。

韓国語の場合は、一般動詞の語幹の後に尊敬の意味を持つ尊称補助語幹の「(으)시」をつけることで敬語動詞を作ることができる。たとえば、「가다 (行く)⇒가시다」「오다 (来る)⇒오시다」「보다 (見る)⇒보시다」「받다 (もらう)⇒받으시다」「입다 (着る)⇒입으시다」「먹다/들다 (食べる)⇒드시다」のように、尊称補助語幹「(으)시」が尊敬の意味を持つ尊敬動詞を作る役割をしている。韓国語の場合、敬語専用動詞には必ず尊称補助語幹「(으)시」が含まれている。

(日本語) おじさんたくさん召し上がられましたか。

(韓国語) 할아버지 많이 드셨어요?

三つ目は、日本語の敬語化の特徴で、「話す⇒お話になる」のように、特定の形式に埋め込んで敬語の意味を持たせるもので、韓国語には存在しない。これに相当する形式としては、「お～になる」「御～なさる」「御～あそばす」「～なさる」などの尊敬表現と、「御～する」「御～いたす」「御～いただく」「～させていただく」「御～申し上げる」などの謙譲表現がある。謙譲表現には、「呼ぶ⇒お呼びする」「挨拶する⇒ご挨拶いたす」「言う⇒申す」「見る⇒拝見する」「会う⇒お目にかかる」のように、謙譲語を用いる謙譲表現もある。

韓国語の謙譲動詞は、「묻다 (たずねる)⇒여쭙다 (伺う)」「보다 (見る)⇒뵈다 (お目にかかる)」「데리다 (連れる)⇒모시다 (お連れする)」などのような専用謙譲表現が存在するが、その数は限られている。それは、「읍」という形態素の退化によるものと考えられる。

3) 助詞の敬語法

助詞の敬語法は、韓国語には存在しているが、日本語には存在しておらず、語彙的・文法的敬語表現での一番大きな違いと見られる。これは、主語である尊者に対する主格助詞「가(が)」「이(が)」の代わりに、助詞「께/께서」が付き、敬意を払うものである。「께옵서」が用いられると極尊待表現になる。これらの主格尊待は、用言に尊称補助語幹「～시」が挿入される尊敬表現を伴う。

할아버지께서 말씀하신다.

おじいさんがおっしゃる。

임금님께옵서 납시옵니다.

王様がお出でになられます。

선생님께서 주셨습니다.

先生が下さいました。

어머님께 보내는 메일입니다.

お母さんに送るメールです。

韓国語は、このように助詞をも敬語表現にすることで、名詞、助詞、形容詞、動詞のすべてに敬語表現を持たせることになる。一つの形式を備えた敬語表現から、すべての形式において敬語表現を備えるものまでさまざまなレベルの複雑な敬語表現が存在するのである。

(어머니가 예쁜 모습으로 들어온다. : 母がきれいな姿で入る)

어머니가 예쁜 모습으로 들어오신다. (動詞のみ尊敬法)

母がきれいな姿でお入りになられます。

어머님이 예쁜 모습으로 들어오신다. (名詞, 動詞)

어머님께서 예쁜 모습으로 들어오신다. (名詞, 助詞, 動詞)

어머님께서 예쁘신 모습으로 들어오신다. (名詞, 助詞, 形容詞, 動詞)

어머님께옵서 예쁘신 모습으로 들어오신다.

お母様がおきれいな姿でお入りになられます。

3. 敬語を用いる場面による分類

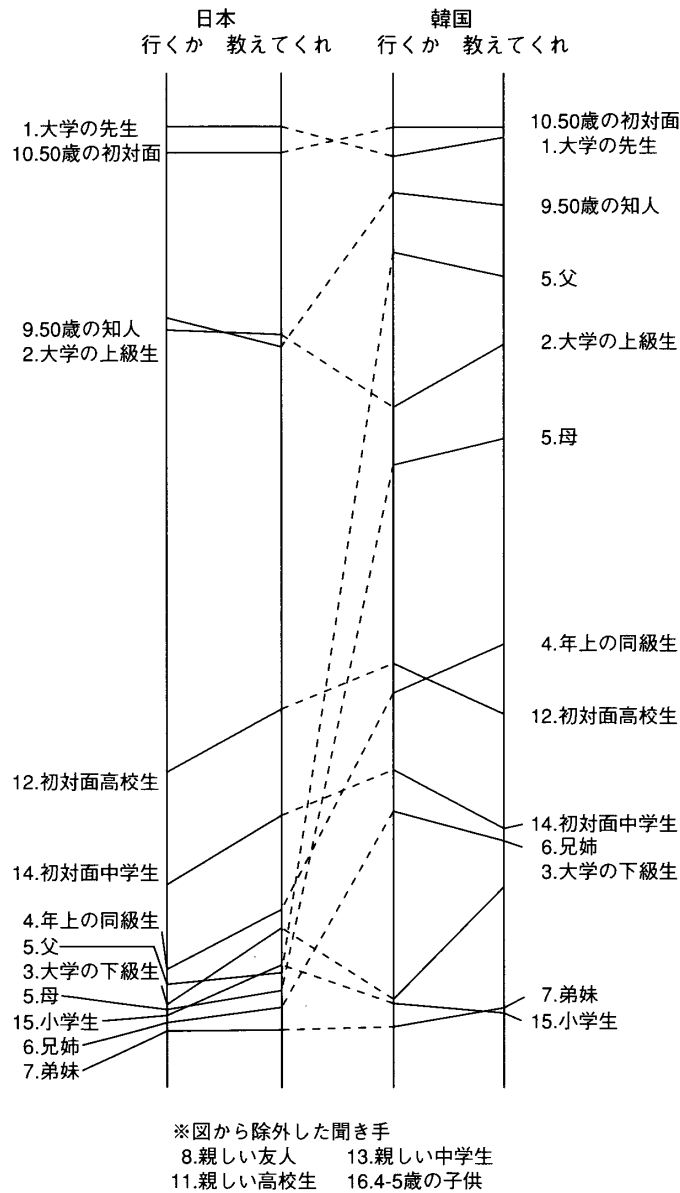
1) 聞き手に向けられた敬意表現

萩野他(1990)は、聞き手に向けられたすべての尊敬表現を扱う聞き手尊敬と、聞き手以外の第三者に向けられた第三者敬語とを区別している。萩野他(1990)では、日本語と韓国語における聞き手に対する敬語用法についての調査において、日本と韓国の大学生の敬語使用の状況を調べ、用いられる敬語表現の丁寧さに基づく受け手の段階付けを試みた。これは、「行くか」「教えてくれ」に当たる敬語形式の選択に基づくもので、その結果は図2の通りである。

図2から分かるように、日韓の間には敬語の使い分けの基準に大きな違いが見られる。日本では、「聞き手との社会関係や親疎関係」が大きく働くのに対して、韓国では、「聞き手との年齢差」が大きく働くという敬語用法の相違を示している。こうした結果をまとめると、以下のようなになる。

(1) まずは、「親」や「兄・姉」のように世代が上の人間に対する丁寧度の違いである。日本では「親」や「兄・姉」「弟・妹」に対しても「同じ家族の一員」として、誰に対しても同じように待遇する低い丁寧度で接するが、韓国では、親にはきわめて丁寧に接するとともに、「弟・妹」より「兄・姉」の方に高い丁寧度で待遇するなど、家族内でも上下関係を考慮している。

(2) 「大学の上級生」と「大学の年上の同級生」に対する丁寧度の差にも違いが見られる。日本では、「上級生」には丁寧に接しているが、「年上の同級生」には丁寧でない接し方をし、



(出所：萩野他 (1990) 18頁)

図2 日本と韓国の聞き手に対する丁寧度の違い

両者にまったく違う丁寧度で待遇する。学年差という社会関係の差を重視している傾向と見られるが、韓国では、「上級生」のほうが「年上の同級生」よりやや丁寧であるだけで、日本ほどの大きな差は見られない。韓国は、学年差という社会関係の差より、年齢の差を重視しているため、「上級生」と「年上の同級生」の両者の間の差が小さくなると見られる。

(3) 「50歳くらいの人」に対して、日本では、知人なのか初対面なのかで程度差を付けた待遇をし、相手との親疎関係によって丁寧度が変わる。韓国では、親疎関係の影響がなく、いずれの場合でも丁寧に接するというように、年齢で丁寧度が決まる度合いが高い。

2) 第三者に向けられた敬語表現

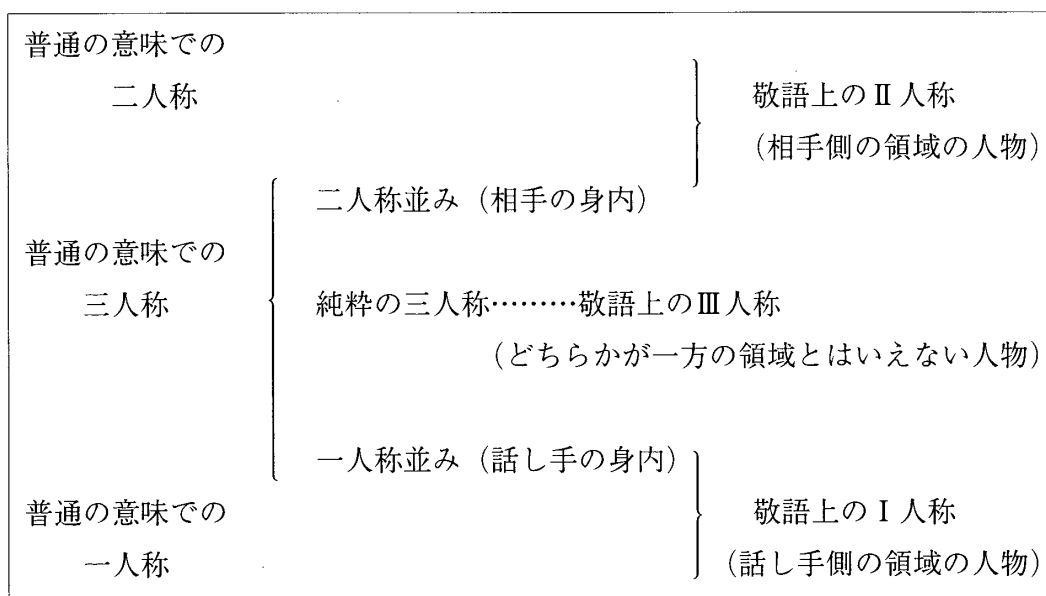
さらに、萩野他(1991)では、日本語と韓国語の第三者に対する敬語用法についても比較対照を行っている。これは、大学生が日常接する人物(自分、父親、大学の学長、先生、上級生、同級生)を想定し、「ある人物が別の人物に本をあげた」ということをどのように表現するかを、聞き手が先生の場合と親しい友人の場合について調査したものである。

この結果、日本語の第三者に対する敬語の使い分けを決める際に、聞き手に相当の配慮を払っていることが分かった。日本語の第三者敬語は、話し手による人物間の関係の把握を表すものではなく、聞き手に対する待遇を表すものであり、相対敬語である。

韓国の第三者敬語は、本来の第三者敬語の性格がよく保持されている絶対敬語の性格が強いとされる。第三者が父親などの身内である場合、日本語では、身内の「内外」関係から低く待遇するのに対して、韓国語は身内に関係なく、父親に対して高い待遇をしている。日本語には、授受動詞が存在し、その使い分けが敬語の使い分けに複雑に関連するが、韓国語にはそのような体系がない。日記を書く場合においても、韓国語は第三者に対する敬語使用規則がよく守られているが、日本語の場合は、敬語が使われることは少ない。

3) 人称と敬語の関係

親疎意識や内外意識が場面や人称によって言葉遣いを多様に変える相対敬語の性質が現代日本語の特徴である。このような日本語の人称と敬語の特徴に関して、菊池(1994)は、聞き手の身内であるか否かの「内/外」の関係を中心に、「敬語と人称」について以下のように整理している。



菊池(1994)は、この敬語的人称に基づいて、敬語の適用ルールを以下のように定めている。

敬語の<適用>ルール (一)：敬語上の I 人称の人物を高めてはいけない。

敬語の<適用>ルール (二)：敬語上の III 人称の人物で、聞き手から見て高める対象と思われないような人物を高めるのは、聞き手に対して失礼になる。

敬語の<適用>ルール (三)：聞き手から見て同等以下の人でも、話し手がその人を高めることで結果的に聞き手のことも立てることになる場合は、その人を高めてよい。

日本語の人称的観点における尊敬表現は、主に話題の主体である三人称のことになる。つまり、話題の主体である三人称を「上下関係」より「内外関係」を重視し、敬語を使うべきか否かを定めることになる。その三人称が「ウチ関係」にある人物であれば「上下関係」に関係なく敬語的には「一人称並み」に扱い、三人称の場合でも、聞き手との関係において「相手の身内」である場合は、相手に対する敬意の表現として敬語が使われる。

IV. 絶対敬語と相対敬語

1. 話し相手（聞き手）に向けられる尊敬表現

日本語においても韓国語においても、二人称に当たる話し相手に対する尊敬表現の基本的な相違については、前節の萩野他（1990）の観察とおりであり、韓国語は「内外関係」に関係なく「上下関係」から尊敬表現が使われるのに対して、日本語は「上下関係」より「親疎関係」や「内外関係」が関連することが分かった。もっとも、韓国語における「上下関係」では、社会関係による「上下関係」より、年齢差による「上下関係」の方が優先される。次の例を見てみよう。

(20代の年下のお嬢さんと40代の年上の家政婦との会話)

年下お嬢さん：아줌마, 지금 시장 가시려고요?

おばさん, 今から買い物ですか。

年上家政婦：응, 그래. 뭐 부탁할거라도 있니?

ウン, そうよ. 何か頼みでもあるの?

年下お嬢さん：예, 케이크 좀 사다 주세요.

はい, ケーキ買ってきてください。

年上家政婦：그래, 알았어.

うん, わかった。

(20代のボスと40代の部下)

年上部下：두환아, 이제 그만 가자.

トゥハン, もう行こう。

年下ボス: 영태형님 먼저 가세요.

ヨンテ兄貴, 先に行ってください。

このように、年齢の「上下関係」が非常に重視される。しかし、年齢の「上下関係」が重視される中、複雑な社会関係におかれている現在では、その社会関係の「序列的上下関係」が完全には無視できず、言語生活にも反映されている。そのため、両方ともに敬語表現を用いることになる。

(20代の社長と40代部長)

年下社長: 김부장님 점심 드셨어요?

キム部長, お昼ご飯召し上がりましたか。

年上部長: 예, 사장님. 사장님 아직 안 잡수셨어요?

はい, 社長。社長はまだ召し上がってませんか。

軍隊のような特殊階級社会においては、年による「上下関係」は無視され、階級的な「序列的上下関係」が優先される場合もある。

年下の上司: 빨리 가.

早く行け。

年上の部下: 예, 알겠습니다.

はい, 分かりました。

このような「序列的上下関係」は、軍隊などの特殊な状況以外にも存在する。たとえば、「年下のおじと年上のオイ」の関係で、「年下の子供であるオジとオバ」に対して、「大人で年上のオイとメイ」は敬語を用いることになる。これは、血族関係による「序列的上下関係」の現れであり、韓国社会が儒教的な思想のもと、血縁関係を重んじる社会であることを物語るものである。

もう一つの例としては、義理の兄弟関係において見受けられる。「年下の義理の姉や兄と年上の妹や弟」の関係である。この義理の兄弟関係の序列は、実の兄弟関係における序列が優先されるため、義理の兄弟がたとえ年下であっても敬語を使うことになる。但し、この序列に関しては、身分階級が存在していた昔ほどその制約が強くない。このように、「序列的上下関係」が考慮されることで、年齢による「上下関係」と対立を起こす場合は、互いが敬語表現を用いることで、上下関係の矛盾を和らげている。

2. 第三者に向けられる尊敬表現

1) 二人称並みの第三者

話題の主体である第三者に対する尊敬表現は、日本語と韓国語においては、かなりの相違

を表している。それは、日本語において「ウチとソト」関係が言語生活に影響を及ぼす相対敬語をなしているのに対して、韓国語は「ウチとソト」の関係には拘らない絶対敬語であるといえるからである。たとえば、日本語の場合、

(先生がご自分の赤ちゃんの写真を見ている時、先生に)

「先生、お子さんはおいくつですか」

という会話がありうる。この場合、話題の主体である第三者の「お子さん」は、聞き手領域に属する所有物であるとの認識から、聞き手を待遇する表現として敬語が使われている。しかし、韓国語の場合、

「선생님, 애기는 몇살이에요? (先生様、こどもは何歳ですか)」

のように、尊敬すべき先生という聞き手に対しても、その聞き手の所有物が話者より年下だと思われたら、敬語は使わないのである。

先生の子供が赤ちゃんではなく、大きい子供である場合や「話者との年齢さがあまりないと推定される」場合は、

「선생님 따님은 몇살이에요? (先生様のお嬢さんは何歳ですか)」

の表現にかわることもある。赤ちゃんではなく大きい子供であるというところから、「딸(娘)」に当たる名詞を「따님(お嬢さん)」のように尊敬表現に変えているが、年下である三人称に対して「몇살이에요? (何歳ですか)」の代わりに、日本語のように「몇살이세요? (おいくつですか)」の表現を用いることは難しい。すなわち、聞き手に対する尊敬範囲を広げ、聞き手の所有を表す「先生の娘(선생님 딸)」に対する尊敬表現として、「先生のお嬢さん(선생님 따님)」までは尊敬表現が用いられたが、「몇살이에요? (何歳ですか)」には、「몇살이세요? (おいくつですか)」の表現が用いられないのである。日本語の場合、一層高い尊敬表現になると、

「先生のお嬢さんのお年はおいくつですか (*선생님 따님의 연세는 어떻게 되세요?)」のような表現が可能であり、同じく聞き手領域を尊敬する表現であると見ることができるが、韓国語においては成り立たない。

さらに、先生のお子さんではあるがすでに大人で、話者より年上であると推定される場合は、

「先生、お嬢さんはおいくつですか (선생님, 따님은 몇살이세요?)」

のように、名詞の「娘(딸)」は「お嬢さん(따님)」にかわり、述語にも尊敬補助詞「시」を挿入した尊敬表現が使われる。これは聞き手の領域を広めた聞き手に対する敬語ではなく、話題の第三者に対する尊敬表現と見られる敬語であり、年齢という観点からの観察に基づいている。さらに、「かなり年をめされた大人で、話者より明らかに年上で、年齢差があるように感じられる」場合は、

「선생님 따님께서는 연세가 어떻게 되세요?」

(先生のお嬢さんはお年がおいくつですか)

のように、名詞「따님 (お嬢さん)」はもちろんのことで、助詞においても「은 (は)」ではなく、「께서 (は)」が使われ、「나이 (年)」に対して「연세 (お年)」が使われ、述語も「되세요」のように「(으)시」が含まれる尊敬表現が使われる。

2) 「ウチ」関係の「上者」

日本語の場合、「ウチとソト」関係において、話者にとって上者であっても、「ソト」に対して「ウチ」を言及する際には、敬語を使ってはいけないというルールが適用される。たとえば、

「父は、いません。」

「?? 아버지는 없어요」

「* 父は、いらっしゃいません。」

「아버지께서는 안 계시는데요」

「父がくれました。」

「* 아버지가 주었어요」

「?? 父が下さいました。」

「아버지께서 주셨어요」

に見られるように、韓国語では「ウチ」の人であっても話し手にとって尊敬語を使う相手に対しては、「ウチとソト」に関係なく尊敬語が使われる。これが家族関係の場合でも変わらない。日本語の場合、家族はもちろんで、会社やその他の人間関係においても「ソト」に対して「ウチ」の人物に対して敬語は使わないのがルールである。たとえば、自分の上司である田中部長にかかってきた電話に、

「田中はただいま席をはずしておりますが……」

になる。しかしながら、日本語の敬語が絶対敬語から相対敬語へと発展してきたことを示す痕跡を見つけることは可能である。たとえば、

「加藤部長、何時にご出発になりますか？」に対して

「私どもの部長の加藤は、七時に出発すると申しております。」

のように、「加藤は」という「呼び捨て」の形ではなく、「部長の～は」の形をとることで、絶対敬語の名残を残しているといえよう。

V. む す び

日本語と韓国語はさまざまな側面において非常に似通っており、敬語表現についても同様の傾向が示された。すなわち、数々の言語のなかでも、日本語と韓国語の敬語表現の類似性

は際立っている。しかしながら、両言語における敬語表現の決定的な違いにも注目しなければならぬ。日本語の場合、相対敬語として、発話の場面や状況に応じて敬語表現が使い分けられるのに対し、韓国語においては、絶対敬語として、たとえ身内のことであろうともそれが年の上下関係において目上であれば、敬語が使われるのである。これには儒教の「長幼有序」思想が大きくかかわっているといえよう。

もっとも、日本語の敬語がもともと今日のような相対敬語であったわけではない。敬語の発展過程を辿っていくと、日本語においても昔は絶対敬語が使われていたことが分かる。それがだんだんと相対敬語へと変遷してきたのである。日本語の敬語は、複雑な社会関係と敬語使用場面の多様化によって、絶対敬語から相対敬語へとシフトしたといえよう。しかしながら韓国語の場合は、絶対敬語から相対敬語へのシフトは見られず、敬語使用における条件に矛盾が発生した場合、話者同士が互いに敬語を使うことによって、絶対敬語のルールを保持している。両言語における、このような発達の違いは非常に興味深く、今後の研究課題のひとつといえよう。そしてこのような研究課題に取り組むためには、両国の文化的側面での比較を意識しながら、敬語発達の多様化の視点からさらなる研究を進めていく必要があるだろう。

参 考 文 献

- 井出洋子他 (1986) 『日本人とアメリカ人の敬語行動』 南雲堂
 井出洋子 (1987) 「現代敬語理論—日本と欧米の包括へ」 『月刊言語』 Vol. 16-8
 井上史雄 (1988) 「動いている現代敬語」 『国文学解釈と教材の研究』 第33巻15号
 王子のキツネ (1985) 「敬愛表現法」 言語 Vol. 15-9
 賈恵京 (2001) 『日韓両言語における敬語の対照研究』 百帝社
 彭国躍 (1997) 「敬語の類型論的対照研究——日本語、英語、中国語を基本モデルとする——」 富山大学人文学部紀要第26号
 菊池康人 (1994) 『敬語』 角川書店
 金田一京助 (1995) 『日本の敬語』 角川新書
 辻村敏樹編 (1971) 『敬語史』 大修館
 萩野綱雄, 金東俊, 梅田博之, 羅聖淑, 盧顕松 (1990) 「日本語と韓国語の聞き手に対する敬語用法の比較対照」 『朝鮮学報』 第136号
 萩野綱雄, 金東俊, 梅田博之, 羅聖淑, 盧顕松 (1991) 「日本語と韓国語の第三者に対する敬語用法の比較対照」 『朝鮮学報』 第141号
 林 四郎・南不二男編 (1973) 『敬語講座1~10』 明治書院
 P. Brown and S. C. Levinson (1987) *Politeness — Some Universals*